
光と闇の叙事詩

しゅん、 、 x 1 0 5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇の叙事詩

【Nコード】

N1945G

【作者名】

しゅん、x105

【あらすじ】

遠未来旧文明の機械人形の再生に成功した女学生リーズと人形に恋をした軍人ガーライルの話。マフィアのボスと共に血の道を再び歩む機械人形をとめることは出来るのだろうか？

プロローグ（前書き）

あらすじと物語がかわるかも（汗

プロローグ

ブラックボードはいつの時代でも黒い。

しかしもうチョークで書かれるような時代は過ぎ去った。

電子版の上におかれたタブレットはチョーク似て非なる文字を作り出し、

机の上におかれたコンピューターはカタリとも音を立てることなく、情報の処理を行っている。

描かれているのは一つのヒトガタの設計図

話し合う声、意見、罵声、次第に熱くなっていく議論

それらが一つの意見に収束したとき私は……………

夢から覚めた。

私リーズ・リンロンドは非常に不味い事態に襲われていた。

一つは授業中寝ていたということ

二つは鬼教授が私の前にたっていたと言ったこと。

その二つの式が導く方程式は、、、、私の死だった。

周りからクスクス笑いが聞こえる。

人の不幸は蜜の味とは、よくいったものだ

「リーズ・リンロンド 授業中居眠り結構」

ぴしゃり、と手に持つ鞭を振るう。

「睡眠や休憩は勉強や発明における多いなる手助けとなりうる。」

「はいっつ！」

「それで 私の授業で睡眠を採って何か発見はあったかね？」

「はいっ。レブロック配列にG線を加えることによりバランスが安定するのではないかと思いました」

私は夢の中で聞いた内容を咄嗟に言った。

「よろしい ちゃんと勉強をしているようだ」

教授はぴしゃりと鞭を掌に叩き、授業を続行する。

ああつ助かった。どうしてこう授業中って眠くなるんでしょうねえさつき教授に怒られたばかりだというのがにまた眠くなってくる。

結局私はまた居眠りをして教授に怒られた。

私は優秀なので課題など出されなかった（出されたとしてもやってやるものか！！）

まだ時刻は昼。しかし私の大学での今日の予定は終了だ。

真っ直ぐに家に帰ろうとする。

学校から私の家まではなかなかの距離がある。

故に今日はお迎えがいた。

バルト・リンロンド・ストラッド

私の同居人だ。戸籍上は従兄弟ということになっている。

彼は大型のバイクに跨り校門近くの門で待っていた。

「やつ 今日もご苦労」

「ご苦労じゃねえだろう。」黒いボサリとした髪の毛はだらしがな
いというより荒々しい印象を与えレザーコートが多少きつめの印象
を与える

「ほら乗れよ」

バイクの上で風を受けるのはとても気持ちがいい。

大型のバイクであるのにもかかわらず排気音とエンジンの音はあま
り五月蠅くない。

時折感じる舗装の悪い道路の感触も慣れれば気持ちがよく、居眠り
を妨げてくれる。

町並みには、レンガ造りのビルが並び、今日も商売逞しい輩が看板を建てる。

リニアラインのステーションを中心として放射状に広がるこの町は壁を境にして大きく様子を变える。

シールドと呼ばれる旧大戦の遺産は町の区画分けに今は役立たされていた。

私の家はスラムと呼ばれる区画の近くに位置をする。

あまり治安は良くないが、物価が安かったり色々いけないことがこつそり出来るのがポイントだ。

盗品は安く売っているし、子供はお小遣いを稼ぐために色々やってくれる。

そんなわけで私は日々を堪能している

「バルト ちょっと止めて」

いきつけのパン屋による。

ここのおじさんがやっているパンやは安いし量もあることで有名だ。鼠の肉入りのパンを売っていることだけが嫌な点だ。

私は鼠が嫌いだけどその安さからスラム街では人気が高い。

まあ人それぞれ価値観が違うってことかな？

また倍バイクに揺られること10分家に着いた。

「ふうっ ありがたいまあ」

「ただいまって自分の家だろう？」

苦笑するように彼は言う。

「いいの一週間ぶりの我が家なんだから」

そういつてソファアの上に倒れこむ。

うん我が家ながわ汚い。

そう

うちにはあちらこちらにガラクタが散乱していてとても人が住める環境ではないのだ。

これもぜんぶバルトのせいだけど気にしない、気にしない。

服を脱ぎ散らかしてから瓶ジュースを飲み干し仮眠をとることにする。

「君から乙女の恥じらいという言葉を聴いてみたいものだね」

そうして私は眠りに落ちた。

小説を続けて書くという習慣がないので自分のノルマにするために投稿始めます。

もし読んでくれるなら非常にうれしいです。

よろしく願います。

プロローグ（後書き）

この小説は飽き性の作者が継続して小説を書くために作られたものです。誤字脱字、文法の間違えは使用です。
後でまとめて直すので気にしないでくださいorz

感想はぜひとも欲しいです。

つまなくても感想が欲しいです。

2日に1回更新して行きたいとおもいます

1話 夜のバイト〜強襲編

あつやばい 寝過ごした 今日バイトはいつてたのに
体にかかったブランケットを剥がして跳ね起きた。

ブランケットなんてかけて寝てたっけ？

まあ慢性的に寝惚けている私がそんな細かいこと覚えてるわけないけどな。

昼は学生 夜はバイトの私は基本的に暇というものがない。

それは生物として面白いことだと思う。

犬は生涯の3分の2は寝てるというし、人間だって3分の1は寝ているし漠然と生きている人もおおい
忙しいことは幸せだと思う。

「バルト!!!」

彼の準備は出来ていた。

これから私は命を懸けたバイトにいくと思う。
壁にかけてジャケットを羽織る。

じゃりりじゃりりと防弾用に取り付けた金属プレートが不協和音を奏でた。

そうやって私は夜のバイトに繰り出すのだった。

私たちはいま廃ビルの屋上にいる。

そこに望遠鏡と筒を置いた。

筒はもちろん狙撃ライフルである。

膨大な大きさを誇る狙撃ライフルだがこれは小型のものになる。

アサルトライフルより少しかいところだろうか

狙うは400メートル先のビル

私たちの仕事はここで行われる取引の物を横取りすることだった。

約30分後に取引は始まる。

狙撃はさまざまな要因が必要となる。

たとえば風、相手の状態と味方の状態 どちらも万全を期さなくてはいけない

そこでスポッター（観測者）と呼ばれる2組になる

観測者のいない狙撃は失敗と思ったほうがよい

それくらい重要な役割の役割なのだ。

小型のパソコンを起動する。スコープと繋ぎアンテナを立てた。

これで準備は万端だ。

あとはどのようにまつだけだ

「風が東南に流れてる」ちよっとした風でも弾道は曲がってしまう。

その誤差を機械とマニュアルで調整する

取引の10分前になった。

ドアが開き細身の男と太った男が入ってくる。

でっぴりとした様子は醜悪でこっけいですらある。

予定は早まったようだ。

バルトが指で合図を送る。

パスン 間抜けた音とマズルフラッシュが連続

一拍おいてガラス割れた音と薬きょうの落ちた音が鈴のように 芸術的に鳴り響いた。

パソコンに写った画像では細身の男が胸を抑えうずくまっていた。

続いてバルトが立ち上がる。

そして不自然にまで膨らんだ足でビルの屋根を跳び始めた。

驚異的な速度で加速 その動きはとても人間のそれではない。

がしゃりがしゃりと機械音がする。

私はライフルをバルトの変わりに片付ける。

弾丸のないライフルはただの重石に過ぎない。

バルトはビルのガラスを突き破った。
その黒いコートを纏い、動く姿はまるで悪魔のよう。

ライフルを撃つてから32秒で200メートルと6階の距離を走破する。

足についた鉤爪はコンクリートをやすやすと抉り、登り階段というものの存在意義を無くす。

太った男は部屋から逃げ出そうとしていたが、ドアはすでに私のコンピューターによってロックされている。

ふふんこれぐらい、ちよろいもんよ。

ついにバルトは標的の部屋に到着。

体の節々からでる蒸気がより非現実性をまします。

「いいくらいだ。いくら欲しい。」

「自分の命の値段を聞くとはいい度胸だな？わかってんだろ？あれを渡せ」

「それだけはお許しを あれを奪われたら私は殺されてしまいます。

「頭を下げる男 その男の頭を 無慈悲にもバルトは 粉碎した。」

何度見てもなれる光景ではない

自分の性で殺人が起こるといふのは。

やってしまったことは戻らない。

故に後悔はしない。してはいけない。

男のムネポケットを弄るバルト。

その顔からは明らかに嫌そうな表情がうかがえる。

黒い小さな箱を見つけ出す。
おそらくそれがターゲットだろう。

ドアが破られた。黒服を着た大男たちが銃を構える。

「動くな」

「馬鹿だな。こういうときにはためらわず撃たなきゃだめなんだぜ？」

指をちゅちゅと振りながら答えたバルト

「かまわん射殺しろ!!」

五丁にわたる拳銃が一斉に火を噴く

それを迎え撃つたのは 回し蹴り 金属音と共に弾は弾かれる。

「じゃあな!!」

バルトは自らが入ってきたビルの窓から飛び降りる

階は14階

常識的に考えて助かる階ではない。

しかしバルトは足をビルの壁に接着、駆け抜けるように逃げる。

ビルの壁には長い日本のラインが引かれてゆく。

そして隣のビルに飛び移り間に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1945g/>

光と闇の叙事詩

2010年10月9日01時39分発行